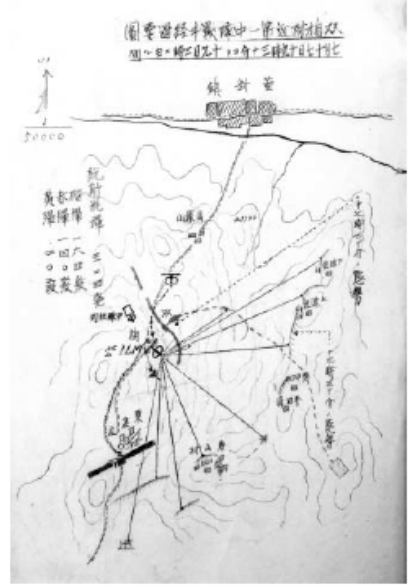
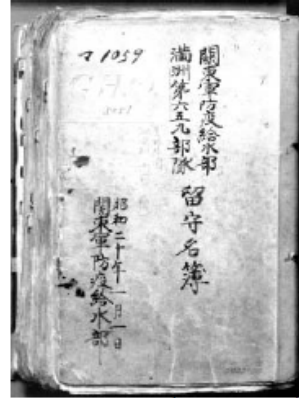


# 旧日本陸軍の新資料出版 歴史研究者「実態学んで」

## 毒ガス戦部隊■731部隊



毒ガス戦部隊の迫撃第5大隊が中国・山西省南部の戦闘の様子を図示した「戦闘経過要図」。旧日本陸軍の位置や行動は青、中国軍は赤で示されている(松野誠也さん提供)

旧日本陸軍が中国で実施した毒ガス戦を詳述した新たな報告書や、人体実験をした731部隊に関する資料が、戦後70年以上を経て相次ぎ出版されている。貴重な陸軍の1次資料が広く活用できるようになり、報告書を発掘した歴史研究者の松野誠也さんは「日中戦争中に戦場で何があったのかは、まだ分からない

ことが多い。悲惨な歴史を繰り返さないために実態を学び、戦争観や歴史認識を考えるきっかけにしてほしい」と訴える。

報告書は、毒ガス戦部隊の迫撃第5大隊が戦闘状況などをまとめた「戦闘詳報」が中心で、日本近現代史を研究する松野さんが昨年、入手した。毒ガス戦部隊が自ら使用の実態を記した戦闘詳報は初めての発見だ。

その記述から、日中戦争中の1938年7月、中国北部

731部隊を中心とした関東軍防疫給水部の名簿(西山勝夫さん提供)

・山西省の戦闘で、現地軍司令部から正式な許可を得ないまま同大隊がくしゃみや嘔吐などを引き起こす「くしゃみ剤」入りの毒ガス弾を使用していたことが判明した。39年7月、参謀総長の指示に基づき、皮膚や粘膜がただれて死亡することがある「びらん剤」入りの毒ガス弾を山西省での作戦で使ったことも分かり、地上部隊による使用が確認された最も早い事例となった。敵と味方の位置や攻撃の様子をカラーで図示した「戦闘経過要図」も見つかった。

一方、滋賀医大の西山勝夫名誉教授は、国立公文書館から731部隊を中心とした関東軍防疫給水部の軍人や軍属の名簿の開示を受けた。約3600人分の氏名や階級、職

種などが確認された。本籍地は全都道府県に及び、愛媛が最多で千葉、広島、徳島、香川、高知などが多かった。

731部隊は旧満州を拠点とし、軍医や大学から派遣された医師らが細菌戦などを想定して人体実験を繰り返したが、全容は不明だ。西山さんは、つながりがあった他の防疫給水部の名簿も入手し、研究会を今月立ち上げた。名簿

に載る隊員の役割や責任、戦後の生き方の解明を進め、医療関係者などの戦争加担が二度と起こらないようにしたいと考えている。

資料は不二出版が「迫撃第5大隊毒ガス戦関係資料」留守名簿関東軍防疫給水部などのタイトルで順次刊行中。問い合わせは同社、電話03(5981)6704。